

研究推進校事業報告書

〈取組の成果とポイント〉

- 外部講師を招いて計画的に研修を行い、今までの自らの授業を見直し、より効果的な主発問や追発問を考え授業を行うことで、指導力向上につながった。児童の発言する機会や話し合いをする機会を意図的に設け、他の人の意見を聞き、自分の意見を考えられるようになった。
- 道徳の授業公開や親子道徳の実施、地域の人材をゲストティーチャーとして招いた道徳授業などで、児童が大人の考えに触れる機会を設け、児童は多様なものの見方や考え方、価値観に気付くことができた。また授業の様子をホームページや学年だより等で紹介したり、事後に保護者の意見をいただいたりして研究推進に関わる情報を共有することで、家庭・地域と連携した道徳教育を行うことができた。

1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電話番号	児童数	備 考
南知多町立 豊浜小学校	知多郡南知多町 豊浜下大田面4の4	0569(65)0027	118名	

豊浜小学校は、知多半島のほぼ先端に位置している。海が近いため、魚介類をとったり、のりの養殖をしたりするなど漁業を営んでいる家庭が多く、昔から漁師町として栄えてきた。地域・保護者の方の多くは本校の卒業生であり、学校に対してとても協力的である。学校の教育活動では地域の産業を生かした体験や、見学を行っている。また、自分の子供や孫が卒業しても学校に積極的に関わってくださる方が多くいる地域である。

2 研究課題

- (1) 「特別の教科 道徳」の指導方法の工夫・改善
 - ① 「特別の教科 道徳」の授業力向上
- (2) 家庭・地域との連携による道徳教育の充実
 - ① 児童が大人の考えに触れる機会の設定
 - ② 日常生活の中で道徳性の高め方

3 研究主題とその設定の理由

(1) 研究主題

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
—家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進—

(2) 主題設定の理由

本校は、全学年単学級の小規模校である。異学年交流をしばしば行っているため、ほぼ全校児童が顔見知りであり、よい人間関係を築いている。令和5年度に6年生児童を対象にして行われた全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果によると、「友達関係に満足していますか」の質問において、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合が100%であった。さらに、「人が困っていたら助けますか」の質問においても肯

定的な回答が多かった。子供たちの人間関係が良好であることが、客観的に示された結果となった。

その他に、全国平均や県平均よりも上回っている項目として「自分には、よいところがある」「ふだんの生活の中で、幸せな気持ちになる」「今住んでいる地域の行事に参加している」「日本や地域のことについて、外国の人に知ってもらいたいと思う」などがあつた。自己肯定感や郷土愛が高いことが分かる。

一方、全国平均や県平均よりも下回った項目として「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思う」「学級の友達との話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」「学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」などがあつた。

これらのことから、人間関係は良好だが、自分の思いを発言し、自分と違う意見と触れ合いながら新しい価値観に触れたり理解したりすることを苦手としていることが考えられる。このことは、全校児童においても同様な傾向が見られるため、学級活動や委員会活動等で話し合いの場を設定し、互いの意見を交換し合う機会を増やすことが必要であると考えた。

(3) 目指す児童像

本校児童の実態をふまえ、目指すべき児童像を次のように設定した。

自分の思いや考えを友達と話し、多くの価値観に触れ、 新たな自分の生き方を見つけられる児童

4 研究の概要

(1) 研究の仮説

- ①道徳教育の見識を深め、「特別の教科 道徳」の授業改善についての指導・助言を受けながら授業力向上に努めることで、話し合い活動が活発化し、多様な見方や考え方に触れることで、自分の生き方について深く考えることができるだろう。
- ②授業の中で大人の考え方や親としての考え方をすることで、視点を変えて考える多角的な見方ができ、深化した自分の生き方を考えられるようになるだろう。

(2) 研究の手立て

- ①外部講師を招へいた計画的な研修による道徳教育の指導方法の工夫・改善
 - ・道徳教育に造詣が深い大学教授を講師として招き、道徳の授業力向上（「中心発問」「補助発問」の工夫等）について研修を行う。
- ②家庭・地域との連携による道徳教育の充実
 - ・道徳の授業公開や親子道徳の実施や地域人材をゲストティーチャーとして道徳の授業に招くことにより、児童が大人の考えに触れる機会を設ける。
 - ・道徳教育の取組をホームページや学校だより等で家庭や地域に積極的に知らせることで、日常生活の中で道徳性を高める。

5 研究計画

月	実 施 内 容
4 月	・研究組織作り
5 月	・児童・教員の実態把握（アンケート）
6 月	・指導案検討会、授業研究会①（2年） 6/22 授業参観 家庭・地域と連携した道徳教育（全学年）
7 月	・指導案検討会、授業研究会②（4年） 7/11 外部講師による研修会① 講師：岐阜聖徳学園大学 教授 山田貞二先生 7/29 外部講師による研修会② 講師：岐阜聖徳学園大学 教授 山田貞二先生 7/31 道徳教育パワーアップ研修参加
8 月	8/23 外部講師による研修会③ 講師：岐阜聖徳学園大学 教授 山田貞二先生
9 月	・指導案検討会、授業研究会③ 9/11 学校訪問（特設授業6年、道徳公開授業1，3，4，5年）
10 月	・指導案検討会、授業研究会④（4年） 10/2 外部講師による研修会④ 講師：岐阜聖徳学園大学 教授 山田貞二先生 ・親子道徳週間（10/8～10/18）
11 月	・指導案検討会、授業研究会⑤（1年） 11/27 外部講師による研修会⑤ 講師：岐阜聖徳学園大学 教授 山田貞二先生
12 月	・指導案検討会、授業研究会⑥（2年） ・校内研修（2学期の振り返り） ・事業報告作成 ・振り返りの実施（アンケート）
1 月	・事業報告書提出
2 月	・町教務主任研修会での成果発表 ・成果と課題の確認、次年度の計画

6 これまでの取組

(1) 外部講師(岐阜聖徳大学 山田貞二先生)による道徳の授業づくり研修会

(ア) 示範授業（7月11日）

岐阜聖徳学園大学教授の山田貞二先生を講師に招き、6年生対象「バスと赤ちゃん」の示範授業を全職員で参観した。「対話」を中心とした「考え、議論する道徳」への足がかりとして、意見を次々と発表させる「コミュニティーボール」や心のバランスを表す「心情メーター」など子供たちの意見を出しやすく「見える化」する工夫を紹介してくださった。また、机の配置の工夫や子供との対話の仕方、構造的な板書、振り返りの仕方などこれからの授業の基盤となる授業を提案してくださった。



〈コミュニティーボールの紹介〉



〈対話中心の授業の様子〉

(イ) 道徳の授業の基礎（7月29日）

道徳の授業をつくる上で大切な教材分析の方法についてワークショップ形式で研修会を行った。発問を考えるまでの手順①教材を読む、②ねらいを設定する、③教材を吟味する、④授業展開を考える、⑤発問を考える、を実践を通して順に学ぶことができた。全体の流れをつかみ中心発問を考える上で道徳性曲線を利用すると考えやすいことを提案していただいた。また、ゲストティーチャーの利用の仕方の講義を受けた。研修を通して、教材をどのように捉え、どのように発問を考えていくとよいのか、多くのヒントを頂いた。



〈教材を吟味している様子〉



〈講義を受けている様子〉

(ウ) 教材分析の実践（8月23日）

第2回目の研修の実践として、3年の教材「仲間だから」、5年の教材「ロレンゾの友達」について、教材分析を行った。まず、全体で2つの教材を読み、感じたことや気づきを出し合った。それぞれの教材について、内容項目やねらいとする価値を確認して、道徳性曲線を書き、この教材の授業づくりのポイントを講義していただいた。

その後、低学年、高学年のグループに分かれて授業の流れや発問を考え、中心発問のみ模擬授業を行った。その様子を参観されて、発問の仕方や意見の広げ方などの御指導を頂いた。また、教員が子供役となることで、発問の仕方ひとつで子供たちは答えやすくも答えにくくもなることを実感することができた。



〈模擬授業をしている様子〉

(エ) 授業研究（10月2日）

第3回の研修で扱った教材「仲間だから」を低学年部会で検討して作成した指導案で、4年生を対象に研究授業を行った。授業では、心情メーターで児童の考えを可視化したり、ロールプレイを通して、登場人物の気持ちを体感させたりした。授業の最後に事前に保護者に答えてもらっていた体験談を紹介した。子供たちは興味深く聞いていた。

授業後に、職員で研究協議会を行い、発問について、児童の反応について、板書についてなどを協議した。その様子を含めて山田先生に指導・助言を頂いた。研修会で学んだことが教師の力量向上につながっているかを確認することができた。



〈研究協議会の様子〉

(オ) 授業研究（11月27日）

今回は、1年生で「けしごむくん」を題材に、議論する道徳の授業を行った。事前の指導案検討会では、「1年生で議論することが本当にできるのか」と意見もあったが、ペープサートを使い役割演技をさせたり、心情メーターを利用して気持ちを表させたりし、発問を工夫することで、1年生なりの議論を行えるのではないかと考え指導案作成を行った。そして、実践してその反省を次に生かしていくことを確認した。

授業では、役割演技をし、けしごむを捨てた持ち主の気持ちを考えた。「うさぎのけしごむくんはかわいくなかったからすてよう」「白いけしごむくんには、こころを込めておせわになりました」とそれぞれの持ち主の気持ちを考えることができた。



〈役割演技をしている様子〉

(2) 家庭・地域と連携した道徳教育

(ア) 学校公開日の取組（全校道徳授業公開）

6月22日（土）の学校公開日には、2時間の授業参観のうち1時間は全学年で道徳の授業を行った。各学年とも家庭地域との連携を意識した授業を行い、ゲストティーチャーを招いたり、保護者に授業に参加してもらったり、事前にとった保護者アンケートを授業で紹介したりした。また、参観した保護者に感想を書いてもらい、ホームページや学校だより「浜っ子だより」で授業の様子や保護者の声を知らせた。

2年「しんじていいのかな」節度・節制

事前に、保護者に「留守番」についてアンケートに答えてもらい、導入の場面で結果を発表した。「安全」に対しての、児童と保護者の思いを比較することにより、より深く考えることができた。

3年「お祭りにこめられている思い」伝統文化の尊重

担任が地元豊浜の鯛（たい）まつりのおはやしの練習に出向き、練習をしている子どもたちの写真を撮影して提示したり、地域の方に祭りに対する思いをインタビューして紹介したりした。

5年「わたしにできることを」家族愛

中心発問について、ホワイトボードを使ってグループでの話し合いを行う際に、保護者にも入ってもらい意見交換をした。最後に家族への感謝やこれから家族のためにしたいことを書き、保護者に伝える場面を設定した。



〈2年 保護者アンケート報告〉



〈5年 家族への感謝〉

- ・地域の人のお話を聞いて良かった。豊浜の子は豊丘のことをあまり知らないの、豊浜・豊丘のことをお互いもっと知れたらいいなと思った。(4年保護者)
- ・授業の内容は分かりやすく子どもたちが話し合うときも一人一人意見が出ていて感心しました。親も考えたり一緒に取り組めたりして良かったです。(5年保護者)
- ・大人になって振り返ってみると道徳の授業で得たものは「人の心を思いやること」だったと思います。算数の計算と違って、答えは無限なのが道徳。道徳の授業を通じて子どもたちは、大きく成長していってほしいです。(6年保護者)

〈浜っこだより 7月号より〉

(イ) ゲストティーチャーを招いた授業の取組

① 6年「国や国土を愛する心」(6月22日 学校公開日)

学校公開日の6年生の授業では、6年児童の祖父であり、地域の前区長会長をゲストティーチャーとして招いた。教材文「米百俵」で地域の未来を考えてあえて苦しい道を進もうとした主人公小林虎太郎の思いについて考えた後に、子どもたちはふるさと豊浜を大切にするために自分にできることを話し合った。その後、ゲストティーチャーに祭りの話を中心に町の魅力を話していただいた。教師でなく、地元の方が豊浜の古き良き伝統や祭りを継承していくことへの思いをお話ししていただくことで、子供たちも親身になって聞き、地元豊浜について深く考えることができた。



〈祭りの魅力を伝える様子〉

② 6年「進んで社会の役に立つ」(9月11日 学校訪問)

働くことについて多角的に考えることができるように、ゲストティーチャーとして、プラモデルやラジオコントロールカーの部品を製作している方をお招きして、ゲストティーチャー参加型授業を行った。

山田貞二先生のアドバイスを生かした座席配置やコミュニティーボールや心情メーターを使用して、授業を進めることにより、活発な議論ができた。ゲストティーチャーには、児童の席に座ってもらい、子供たちの発言について感想や意見を言ってもらったり、自分の体験を語ってもらったりした。ゲストティーチャーと担任が時間をかけて綿密な打ち合わせをし、随所でゲストティーチャーの意見を聞くことで、子供たちはものごとを多面的・多角的に考えることができた。



〈ゲストティーチャーが答えている様子〉

(ウ) 親子道徳週間の取組

10月8日(火)～10月18日(金)を親子道徳週間とし、家庭で教材を読んで感想を書いてもらったり、中心発問の部分を子供と一緒に考えてもらったりした。4年生は、教材『いつも心に「ファイト!」』の音読と感想や関連する身近な出来事の記入を宿題として出した。授業の中で、宿題で書いた感想を小グループで発表したり、学級全体で発表したりした。授業後は、学級通信で授業の様子を知らせた。この教材を通して、自分たちの生活は家族だけでなく、親戚や近所の人などたくさんの人たちによって支えられていることに気づき、その人たちに感謝できているか自分を見つめさせることを目指した。

○親子道徳週間【10月9日(水)】

(4年生 学年だよりより)

いつも心に「ファイト!」を教材に授業を行いました。自分を支えてくれている人たちへの感謝の気持ちと、自分には周りの人に何ができるかを考えました。事前のワークシートで実態にあった身近な出来事を紹介していただきありがとうございました。鯛(たい)まつりでの地域の方から笛の指導だけでなく食事会の企画もしてもらっていること。近所の人に保育園に連れて行ってもらったこと。お子さんからプレゼントをもらったことなど、心の温まるものばかりでした。

児童からは「ありがとう」の感謝の気持ちを言葉で伝えたい。感謝の気持ちを忘れてはいけない。家族が病気になったときは支えてあげたい。自分にもできることがあったらやってみたい。などの気持ちが集まりました。御協力ありがとうございました。

(エ) 他教科と関連付けた取組

4年生1学期の総合的な学習の単元「お祭り博士になろう」に合わせて、学校公開日にゲストティーチャーを招いて、道徳の授業参観「わたしたちのくらすまち 豊浜」、総合的な学習の時間「お祭り博士になろう～豊浜鯛まつり～」を2時間続きで行った。

① 道徳「わたしたちのくらすまち 豊浜」

鯛まつりの中心となって活躍している方2名をゲストティーチャーに招いて授業を行った。まず、児童と保護者が字ごとにグループを作り、自分たちの住む豊浜の魅力について話し合う活動を行った。保護者も子どもたちと一緒に豊浜の魅力を言葉にしていた。次に担任が豊浜の自然や歴史を紹介し、子どもたちとは違う視点に気付か

せた。そして、ゲストティーチャーから鯛まつりの話を聞き、子どもたちにふるさとへの思いやどのように思っていきたいか考えさせた。

② 総合的な学習の時間「お祭り博士になろう」

道徳に続く総合的な学習の授業参観では、まず、鯛まつりに地域でお囃子や太鼓うちで参加する児童が練習の成果を披露した。土曜日であったため、中学生も応援で参加してくれた。その後、道徳に続いて、ゲストティーチャーとして地域の方に鯛を担ぐときに歌う伊勢音頭を教えもらい、歌と合いの手の練習をした。応援の中学生や授業を参観している保護者も太鼓や歌で参加してくれた。



〈おはやし・太鼓うちの披露〉

この授業後も4年生は鯛（たい）まつりの学習や伊勢音頭の練習を行い、7月21日の鯛（たい）まつり当日には、4年生が中心となり学校として小鯛の曳き回しを行った。

③ 鯛（たい）まつりへの参加

鯛（たい）まつり本番に向けて、総合的な学習の時間や朝の会の時間を利用し、小鯛（こだい）のひき回しの練習をしたり、伊勢音頭の練習をしたりした。どの児童も笑顔で小鯛（こだい）をひき回し、大きな声で伊勢音頭の練習をすることができた。

鯛（たい）まつり当日は、全員でおそろいの法被を着て、練習の成果を発揮し威勢よく小鯛（こだい）を曳きひき回し、鯛（たい）まつりに参加することができた。児童の感想には、「5年ぶりに行われて、新しい道にも豊浜らしい雰囲気に戻ってきた。次は打ち込みをやってみたい。」「鳥居は大きな鯛（たい）も引かせてくれてうれしかった。おはやしの練習ではお菓子をもらったりお話をいっぱいしたりして楽しかった。」と地域のことや地域の人との関わりについて考えることができた。



〈鯛（たい）まつり当日の様子〉

④ 道徳『いつも心に「ファイト！」』（親子道徳週間）

家族、近所の人たちなどたくさんの人に支えられていることに気づき、感謝の気持ちをもつことができた。

⑤ 行事 学習発表会「4年生が体験した 豊浜 鯛まつり」

4月からの学習したことを保護者に知ってもらいたいという児童の思いから、学習発表会で「4年生が体験した 豊浜 鯛まつり」を発表した。児童自らで学習したことや体験した太鼓打ちが着物を着るのにかかる時間や鯛（たい）のひき回しの方向などをクイズにし、答え合わせでは実際の体験談を話したり、どうしてその方向なのかその回数なのかなど詳しく説明したりした。最後にクイズに参加してもらったお礼に感謝の気持ちを込めて、実際に鯛（たい）まつりで行ったように体育館のフロアで伊勢音頭を歌いながら小鯛（こだい）のひき回しを行った。保護者の近くを通り、迫力のあるひき回しができた。



〈小鯛（こだい）のひき回し〉

7 研究の評価

【担任の意見】

- ・実践を繰り返していく中で、追発問は意図的に行えるようになってきた。しかし、ねらいとする価値に迫るような追発問はまだ難しい。
- ・高学年をその気にさせる指導が難しい。教師側が一方的に話してしまい、授業の流れが悪くなってしまうことが多々ある。
- ・どのような主発問、追発問をしたらよいか視点が明確になった。しかし、予想外の展開時にねらいに迫る追発問で対応することがまだできない。
- ・保護者の思いを子供に紹介することで、多様な考えに触れることができた。特に3年「お祭りに込められた思い」では、保護者の思いを聞いた後、子供たちより一層お祭りを守り続けていきたいという思いが強くなった。
- ・ゲストティーチャーを招いた授業は、広がり、深まりを感じられた。
- ・保護者アンケートを活用することで、保護者の視点と子供たちの視点の違いに気付くことができ、子供たちも興味をもって授業を受けることができた。

(1) 研究の成果

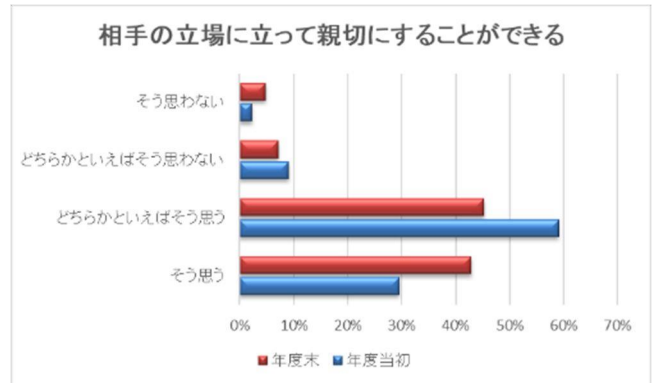
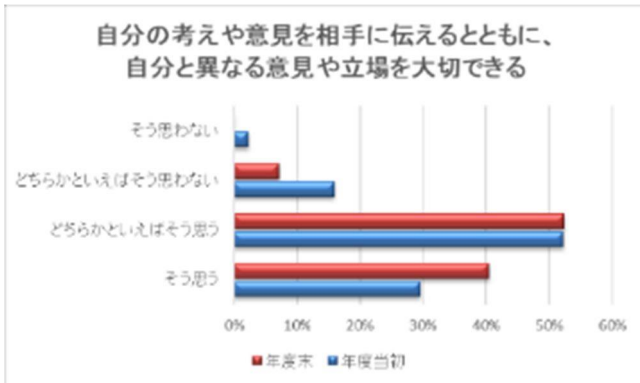
①外部講師を招へいた計画的な研修による道徳教育の指導方法の工夫・改善

教師は、授業の流れ、主発問、効果的な追発問やゲストティーチャーの利用の仕方等について学び、道徳への考え方や授業展開を工夫しながら実践を繰り返し行ったことで指導力向上につながった。

児童は、コミュニティーボールの利用や心情メーター等を利用したことで、発言する機会が増えたり、話し合い活動が活発になったりした。5、6年生を対象に年度当初と年度末に行ったアンケート結果では、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分と異なる意見や立場を大切にできる」の質問に「そう思う」と答えた児童が年度末には10%ほど増加した。また、「相手の立場に立って親切にすることができる」では、「そう思う」と答えた児童が年度末には13%ほど増加した。グラフにはないが「友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合うことができる」でも「そう思う」と年度末に答えた児童が10%ほど増えた。

アンケート結果から、発言の機会や対話の場面を意図的に多く設定することで、自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分と異なる意見や立場を大切にできた

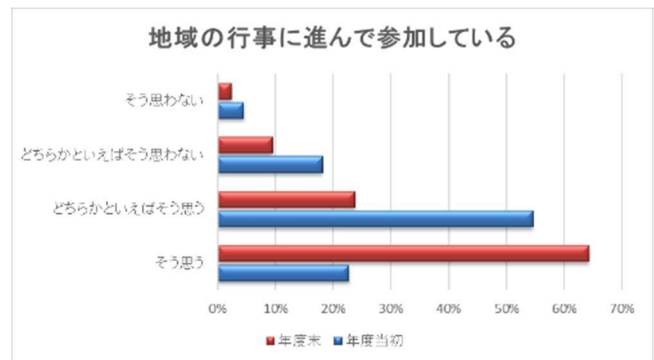
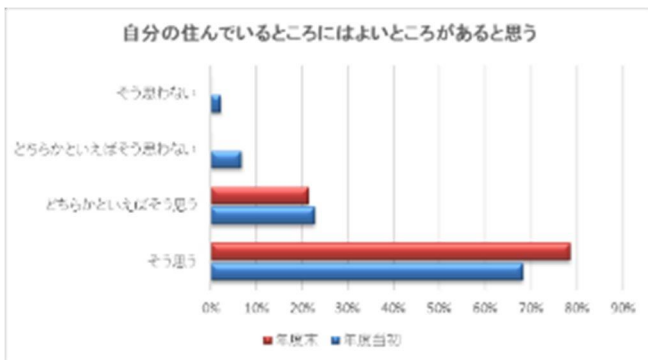
り、相手の立場に立って親切にすることができたり、男女仲良く協力し助け合ったりする児童の割合の増加につながった。



②家庭・地域との連携による道徳教育の充実

保護者や地域の方の意見やゲストティーチャーの話は子供たちに興味をもたせ、授業が広がったり、深まったりすることを実感した。アンケートに答えてもらったり、ゲストティーチャーを招いたりする場合は、授業のねらいが伝わるように分かりやすいアンケート用紙にしたり、ゲストティーチャーと十分に打合せをしたりすることで、ねらいにせまることができた。

5、6年生を対象にしたアンケート結果からは、「自分の住んでいるところにはよいところがある」「地域の行事に進んで参加している」で「そう思う」と答えた児童の割合が大幅に増加した。地域の祭りや行事などの時期に合わせて、ゲストティーチャーを招いたり、保護者へのアンケートを行ったりした授業実践の結果だと考える。



(2) 今後の課題と取組

授業者は授業の流れの中で、ねらいに迫るための追発問をどのように行ったら考えを深化させることができるか悩んでいる。今後も子供たちが多くの価値観に触れ、新たな自分の生き方を見つけられるような「特別の教科 道徳」の授業づくりのため、授業実践を評価し、改善を続ける。さらに、教師が継続的に指導方法を学べるように現職教育を充実させたり、他市町の研修会に参加したりして、ワークシートの工夫や振り返りの方法等も含めた指導力の向上・深化に努める。

また、地域・家庭との連携を図るために、今後も学校だより、学年だより、ホームページ等で情報を発信していく。定期的に「親子道徳週間」を行い、親子で話し合うきっかけを作り、保護者とともに道徳の授業を作り上げていきたい。